

註六 「東大寺要録」によれば、延喜十七年に失火により講堂、三面僧房が焼失した際、京都東寺の會理僧都が佛師五十餘人をひきいて東大寺講堂の本尊千手觀音、地藏、虚空藏菩薩像の造立を行ったという。恐らく、延喜延長の頃であろう。また、僧綱補任卷四や「造興福寺記」によれば、永承三年に、興福寺金堂の造像が、定朝派の手により造立されたことが伝えられている。

註七 大和にあるものでも、融念寺聖觀音像は、小原二郎氏の調査によれば、ハリギリが使われている。その古様な作風とともに注目すべきことであろう。

註八 福岡縣長谷寺の十一面觀音像と長野縣立石寺の十一面觀音像の材及び造法等については、田邊三郎助氏の御示教を得た。また、三重縣正法寺十一面觀音像については、小原二郎氏の調査による。

註九 拙稿「關東の鉦彫について」美術研究一八六號 昭和三十一年五月

註一〇 拙稿「乾漆と鉦彫」大和文華二五號 昭和三十三年三月

註一一 室生寺諸像については、金堂安置像及び彌勒堂の傳釋迦如來等、互に様式的にも差違があり、複雑な様相を呈しており、これを詳述すると、いたずらに本論からそれるおそれがあるので、別稿にゆずることにする。

註一二 丸尾彰三郎氏「板御光から飛天光へ」画說一三號 昭和十三年一月 金森遵氏「佛像彫刻案内」昭和十一年二月 便利堂發行

註一三 金森遵氏「室生寺金堂五佛考」上、中、下、國華五八三、五八四、五八七 昭和二十二年一月刊 昭和四四年六月一〇月

小林剛氏「室生寺の貞觀彫刻について」日本彫刻史研究」所収 昭和二十六年三月刊

永島福太郎氏「室生寺の寺史」奈良文化の傳流」所収

註一四 福山敏男氏「室生寺の建立年代」日本建築史の研究」所収 昭和十八年十月刊

註一五 足立康氏「佛像光背の基本形式について」建築史二ノ三 昭和十五年五月

註一六 室生寺金堂釋迦如來光背の唐草の先端が火焰化しているもので、最も室生寺光背に近いものが、新發見の當麻寺板光背中にあることは重要である。このことはやはり板光背諸像を制作していたある種の系統があつたことを暗示するものであろう。

註一七 毛利久氏「清涼寺釋迦像變遷考」佛教藝術三五、昭和三十三年八月

註一八 もつともこの光背は、頭光と身光と分けた形式のものであるがこれが純粹な舟形光と同時に用いられていることは室生寺金堂地藏の光背を見ても明かである。

附載 靈山寺藥師三尊脇侍板光背の彩色

山崎 一雄

昭和三十三年五月二十三日東京國立文化財研究所の調査團と共に奈良縣富雄町靈山寺藥師三尊の脇侍の板光背を調査する機會を得た。

この光背の彩色に用いられている顔料は白土、朱、丹、岩綠青、代用群青、金等である。本號所載の同光背の原色版について説明すれば、内區と外區との境界の二本の線は金泥でぬられ、地の白く見える部分は白土、外區の右下の神將の立つ座は岩綠青、臙當は白綠、内區の最下段の半分ずつの二個の花文は岩綠青がよく残り、その上方の花は中心から朱、岩綠青、朱を主な色とするうんげん彩色になっている。この花の最も外側の花瓣は現在黄色となつていて、最初は青色であつた筈で、これは代用群青による彩色である。

代用群青は鳳凰堂の壁畫においてはじめてその存在が認められた顔料で、當時不足していたと思われる岩群青の代りに、黄土を藍で染めて用いられたものであり、長年月の間に褪色して黄色になる。この代用群青は鳳凰堂のみならず、醍醐寺五重塔にも見出されて居り、その他室生等の諸佛の光背にも使用されているらしく（まだ確認していない）、さらにまた最近當麻寺曼陀羅堂の天井裏から發見された多數の板光背の彩色にも使用されている。現在知られている限りでは、代用群青の使用されている年代の確實な例は九五一年落成の醍醐寺塔、一〇八八年（治暦二年）の本光背と今のところ十一世紀前後であるが、これが何世紀ごろまで用いられていたのか、當時どういう名で呼ばれていたか等今後の研究にまづべき點が多い。

(一) 山崎一雄、佛教藝術 第三一號 六二頁（昭和三十三年三月）

(二) 山崎一雄、美術研究 第一六九號 二五頁（昭和三十三年一月）